

令和 2 年 1 月 2 4 日 中央教育審議会総会（第 1 2 4 回）における主なご意見
（大学入試のあり方に関する検討会議関連）

- 課題への対応が不十分で、受験生等の不安等を考慮して延期・見直しの判断がされたことについてはやむを得ない面があった。ただ、英語の民間試験の活用については、小学校でも英語が変わる中、高校でも 4 技能がバランスよく学ばれる好機となるはずだっただけに、準備を進めてきた教育委員会としては少々残念。
- 大学入試を高校教育の改革に利用する考え方に異論もあるが、入試が変わらない限り、高校の教育を大きく変えられないというのが残念ながら事実。高校で学んだことが大学入試で正当に評価されるということも大変重要。
- 改革を進めていく上で、課題は小さいに越したことはないが、課題の全くない制度の構築は難しく、実施によるメリットの大きさも考慮する必要。英語 4 技能評価や記述式問題の充実は重要なので、何もなかった状態に戻すのではなくて、改善を加えた上で勇気を持って改革を進めていただきたい。

- 一旦決めた事柄を急に変更したり、やめたりするのは、現場が一番困ること。今回の事態に至ったのは想像力の欠如。検討会議には、高校生に近く、様々な背景を持っている子供たちのことが理解できている人が委員として入っている必要。
- 大学入試のためだけに勉強をするわけではないが、入試で問われるスキルや知識を 3 年かけて育成する必要があるため、早い時期に全体像を示して頂きたい。

- 今の高校生にとってよいものと、これからの時代を生きていくために必要な力を今の高校生にどう付けるのかという、両方の視点が必要。これから生きていく上で必要になる力は大学で学ぶ力にもつながる。それらは現行学習指導要領でも、次期学習指導要領でも示されているものであり、そこに基づいて入試が行われていくということについては、変わりはないと考える。

- 高大接続改革については、一定の時間をかけて幅広い視点から検討が加えられてきたものであるが、経済的な状況や居住地、心身の障害の有無等にかかわらず、受験ができる条件整備をするために立ち止まることにしたと理解。開かれた入試制度となるための検討に大いに期待。
- 初等中等教育の 1 人 1 台 P C の普及は、将来的には入試の内容や在り方を大きく変えていくかもしれないし、働き方改革にも大いに関係がある。こうした点にも着目すべき。